

## 事例研究報告

# 特別支援学校小学部児童の 適切なコミュニケーションを 目指した取り組み

## 児童の実態

- 小学部 男児 自閉スペクトラム症
- 平仮名を書くことができる(形は崩れやすい)。
- 決まった方法で1～12までの数字2つを足すことができる。
- ひらがな表記のスケジュールを使用。

# 児童の実態

## <コミュニケーションについての実態>

- 発音が不明瞭。
- 意思伝達は文字盤を使用。決まった形は手本を見なくても一文字ずつ示して伝えることができる。
- 言語指示は、状況と知っている単語を加味して想像している。
- 行動の意味を理解していないことが多い。
- 場面に合った挨拶ができる。
- パニック、他害あり。天気や気温で不安定になる。
- 注目行動が多い。

## 教員の願い

「文字盤を使用して、意思表出できるようになる。」

→パニックや不安の原因が、  
“何か”を伝えること。

不明瞭な発音をカバーするツールとして文字盤を使用。

→理由を伝えられるようになることで

**パニックや他害が減る**ことを期待。

## アドバイザーからの助言

### 【文字盤の活用について】

- 文字と音が一致しているかどうかの確認をする。
- 正しい音声模倣ができるかどうかの確認をする。

### 【他害について】

- 他害をしたことで、本人の不利益になるように設定する。
- 他害がダメだということを視覚化して示す。

### 【パニックについて】

- 落ち着くまでのルーティーンを設定する。
- 「パニックがなくなる」ではなく「パニック後の復帰までの時間を短くする」ことを目標にする。

# 助言を受けての見直し

## 【文字盤の活用について】

- 正しい音声模倣ができるかどうかの記録をつけた。  
教師「 あ 」 → 本児「 あ 」
- 文字と音が一致しているかどうか(聞き取る力)の記録をつけた。  
一致していない文字に対して, 指導を行った。  
教師「 あ 」 → 本児 (文字盤で「あ」を指さす)

# 指導の手続き

## 【標的行動】

45音中27音(60%)を正しく聞き取ることができる。

## 【手続き】(指導期間①)

「あ」～「ん」(「ゐ」「ゑ」「を」を除く)の正音45音で実施。

- ①教師が発した1音を聞き、聞こえた音を文字盤で指さすよう促す。
- ②前回正答したにも関わらず今回誤答だったものを再度確認。
- ③誤答の中で、いつも同じ間違いのものについて、指導を行う。

## 【達成基準】

①～④の指導手続きにおいて、45音中27音を正しく聞き取ることが3日連続でできたら目標達成とする。

## 【中止基準】

①～④の指導手続きにおいて、正しく聞き取ることが45音中24音以下(55%)が3日間続くと中止し、指導手続きを再考する。

# 記録方法と記録

記録方法：正しく聞き取れた数と誤答の様子を記録する。

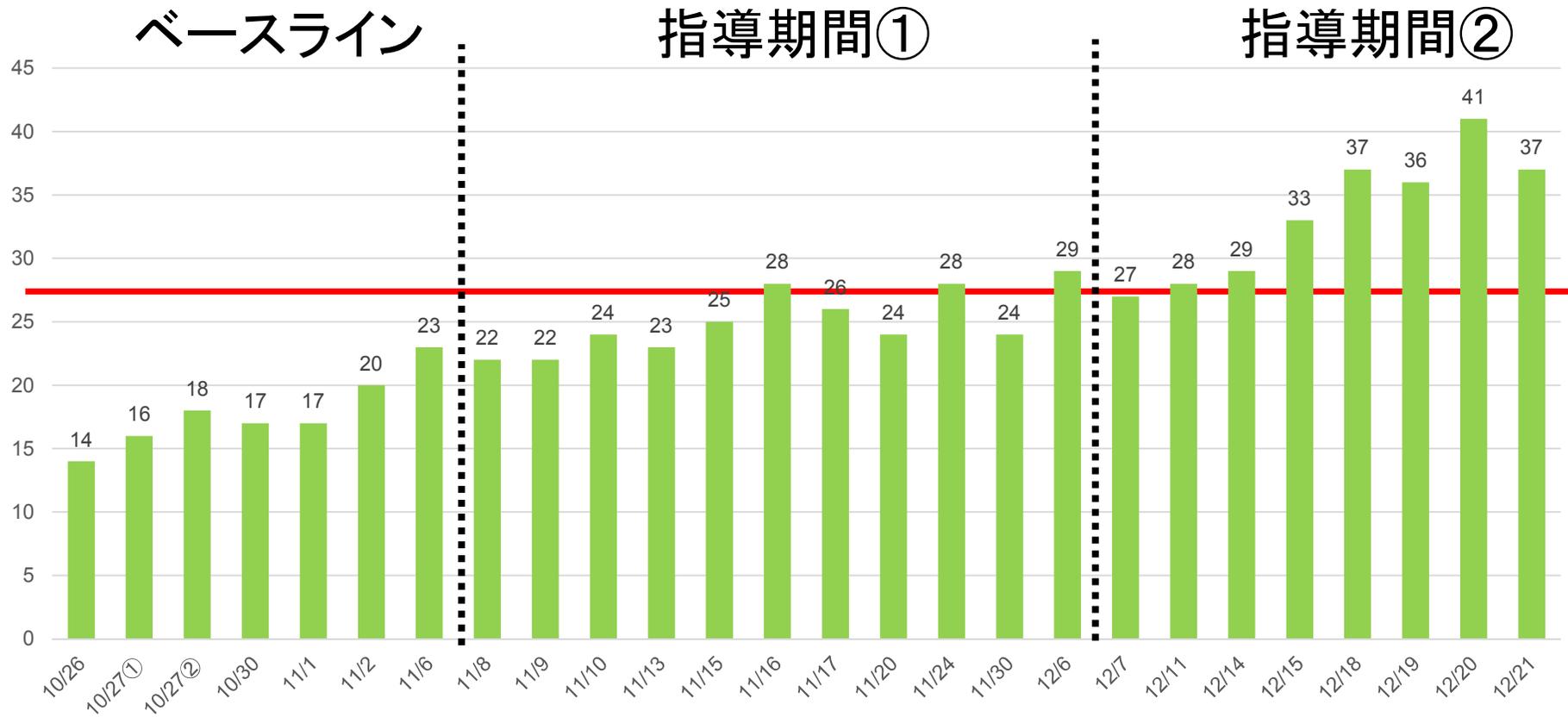
## 記録表

- ・正答は「○」で表記。
- ・誤答の様子は、ひらがなで表記。
- ・指導した文字については表外に記録。

や	○	○	○	○
ゆ	○	○	○	○
よ	○	○	○	○
ら	ま	○	お	お
り	○	○	○	○
る	○	ふ	く	ふ
れ	○	○	○	○
ろ	○	○	○	る
わ	○	○	○	○
ん	○	○	○	○
正答数	37	39	37	34
不当数	8	6	8	11
正答率	82%	87%	82%	76%
指導	サ行～ ラ行		ア行～ ラ行	ア行～ ラ行

# 記録方法と記録

- 正答数の推移



# 記録方法と記録

- 誤答の種類(ベースラインから)

- ①子音が聞き取れず間違う

「 ひ 」 → 「 き 」

- ②法則性がない

「 ろ 」 → 「 ふ, お 」

- ③間違えて覚えている

「 つ 」 → 「 せ 」

- 分からない時に, 指導された文字ばかり答えることが増えた。

- 指導や修正をされないように, 答えているだけで聞き取っている訳ではないと予想。

- 手続きを再考。

# 記録方法と記録

## 【手続き】(指導期間②)

- ①ー1 平仮名表記1文字ずつのカード(以下, 文字カード)を使用し, 「ア行」と「カ行」のように隣合う10文字を机上に並べて提示する(「あ・い・う・え・お」を縦に5枚, 左側に「か・き・く・け・こ」を縦に5枚)。
- ①ー2 教師が発した1音を聞き、聞こえた音を文字カードから選ぶよう促す。
- ①ー3 正答の場合は「はい」誤答の場合は「ブー」と言い, 正誤を示す。
- ①ー4 誤答の場合は選んだ文字カードを発音して, 机上に戻し, 再度「く」と発声して, 別の文字カードを選ぶよう促す。
- ①ー5 正答するまで繰り返す。
- ②ー1 教師が発した1音を聞き, 聞こえた音を文字盤で指さすよう促す。
- ②ー2 誤答の場合は, 正しい文字を指さしながら, 再度音声表記する。
- ②ー3 45音確認し終わったら, 前回は正答だったのにも関わらず今回誤答だったものについて, 再度聞き取りを促す。
- ②ー4 2度目の聞き取りで正答だったものについては, 正答とみなす。

# 指導の成果

## 【文字盤の活用について】

- 文字と音が一致していないことが分かった。
- 間違えて覚えている文字も多いことが分かった。
- 音声模倣 10/26 12音(27%)→12/18 22音(49%)
- 聞き取りの力 10/26 14音(31%)→12/20 41音(91%)
- 言語指示への理解度が低い理由が明確になった。  
→全ての文字と音が一致すれば、**言語指示への理解力アップ**につながるのではないかと期待。

# ここが成功のポイント

- 一文字ずつ確認を行ったこと。
- 教師の指示や反応を、精選したこと。
- 本人に合った指導方法に変更したこと。

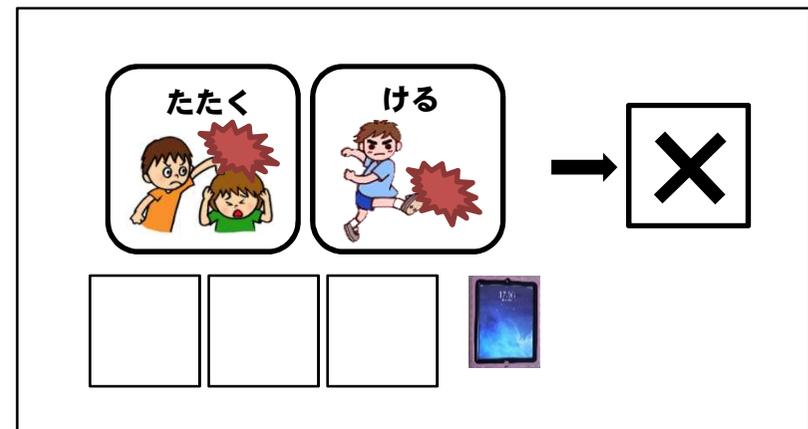
## 現在の指導

- 不安の緩和に対する指導
  - 間違えることがある課題の設定を継続。
  - 聞き取りの評価を可視化。

# 助言を受けての見直し

## 【他害について】

- 指導目標を設定。  
＜ 他害を1日2回までにおさえることができる。 ＞
- ルール作り  
「1日の他害の回数が決められた数以上の場合、  
iPadができない」
- イラストと文字で「叩く×」「蹴る×」と示したシートを提示。  
(ルールの視覚化)



# 指導の手続き

## 【標的行動】

他害を1日2回までにおさえることができる。

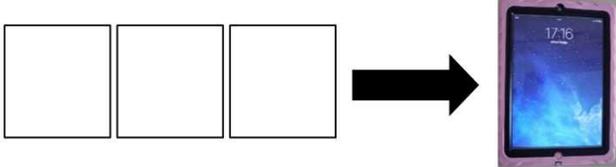
## 【手続き】

スケジュールに、iPadができる時間を提示する。1回叩くと、シートの枠に1つ×印を付ける。枠が×で埋まるとiPadを中止する。

指導期間①1日に2回設定・他害4回以内(達成基準:連続5日間→②へ)

指導期間②1日に2回設定・他害2回以内(達成基準:連続5日間→③へ)

指導期間③1日に1回設定・他害2回以内

	といれ
あいぱっど	
	スケジュール を かえる

# 記録方法と記録

記録方法: 他害の回数と, 目標達成日数を記録する。

記録表

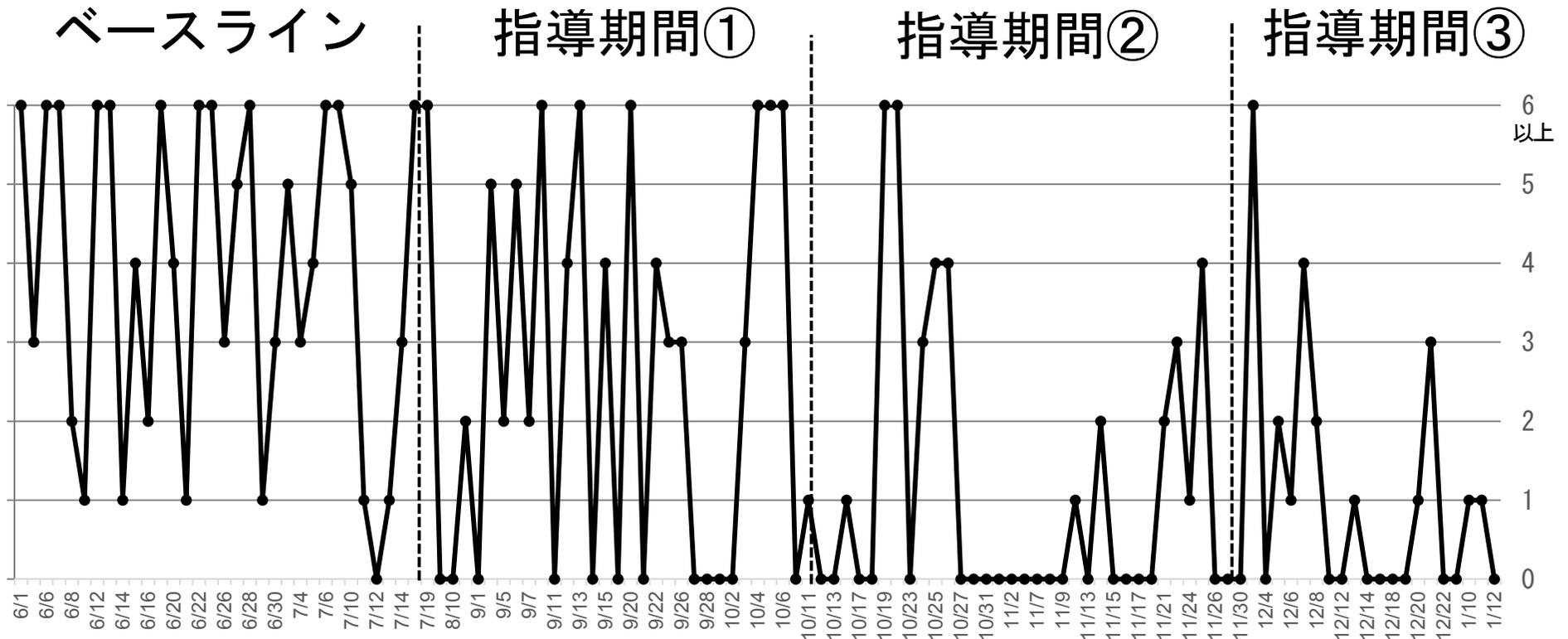
× …… 他害

☆ …… パニック

(数字はレベル)

6校時							
5校時							
昼休み							×
4校時	☆5						
3校時	☆5				××		
2校時	×××						×××
1校時	××	☆5 ×××					
日付	7/18	7/19	8/4	8/10	8/21	9/1	9/4
曜日	火	水	金	木	月	金	月
天気	雨	曇	晴	晴	晴	晴	曇
回数	6	6	0	0	2	0	5
iPad	×	×	○○	○	○○	○○	○×

# 記録方法と記録



29%

51%

78%

86%

目標達成率

# 指導の成果

- 目標達成。
- 他害の強さが変化した。
- 他害がダメだということやルールを理解し、3回以上他害があった日は、自らスケジュールのiPadを中止するようになった。
- 他害を抑えるような様子が見られるようになった。
- 人への他害は、ほぼなくなったが、物に当たることが増えた。  
→今後の課題

## ここが成功のポイント

- ルールを可視化したこと。
- 他害が、本人にとって必ずデメリットになる仕組み。  
(叩くとiPadができない)

# 助言を受けての見直し

## 【パニックについて】

- ルーティーンを導入

- ① 決められた時間クッションを叩く
- ② 数字の穴埋め課題
- ③ 残り6ピースのパズル  
(決められた時間イスに座ると1ピースもらえる)
- ④ 決められた時間カームダウンの部屋で過ごす
- ⑤ お茶を飲む

- 教師間で共通理解を図るため、パニックの激しさや時間を総合して、その度合いをレベルで表した。

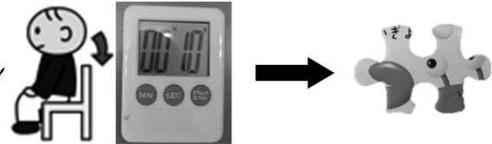
# 指導の手続き

## 【標的行動】

ルーティーン開始から30分以内に活動に戻ることができる。

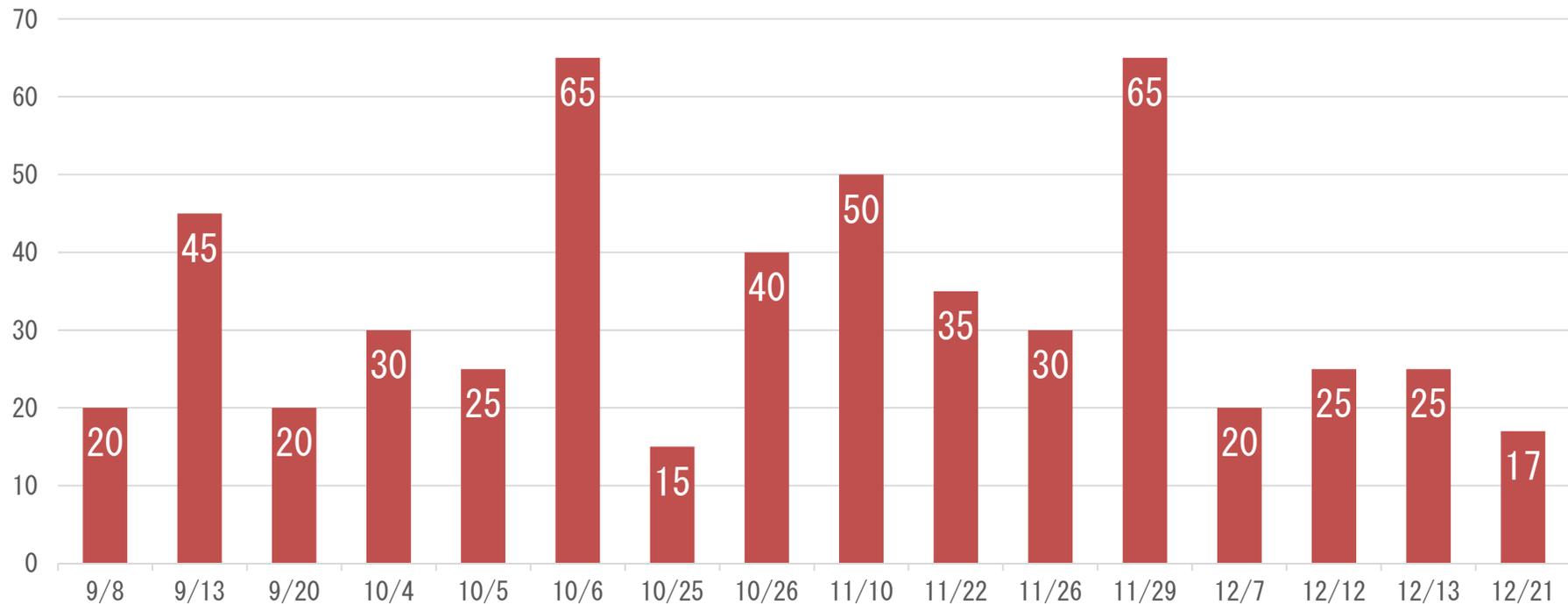
## 【手続き】

- ルーティーンを指示する。
- ルーティーンが1つ終わるごとにスケジュールに丸印をつける。
- ①～⑤の活動の途中で他害があった場合は、①からやり直し。
- ①, ③, ④の時間については、パニックのレベルや様子によって対応する教師が決定する。

	1 くっしょん	
	2 すうじ	
	3 パズル	
	4 へや	
	5 おちゃ	

# 記録方法と記録

記録方法：ルーティーン開始から、活動に戻るまでの時間を計測する。



※教室でのパニックのみルーティーンを活用。

# 指導の成果

- ルーティーンを行っても、パニックの時間は短くならなかった。
  - 「レベルが高い＝時間が長い」ではないことが分かった。
  - パニックの長さやレベルの根拠は、パニックの背景や原因にあるものだと推測される。
  - パニックをレベルで表したことによって、対応した教員との共通理解を図ることができた。
- 
- 教師…指示が統一された。
  - 本児…するべきことが明確になった。

## 現在の指導

- ルーティーンを自ら始められるように、クッションを身近に設置。
- パニックになる前に、自らカームダウンの部屋を使用して落ち着くことができるように指導中。

※「イライラ」「こわい」「かなしい」の感情について指導。

- ①イライラしている様子が見られたら指導開始。
- ②シートを指さして「イライラ = へや」を伝える。
- ③自ら感情カードを使用するまで待つ。
- ④カームダウンの部屋で、10分程度過ごすように指示。
- ⑤出てきたところで、選択肢を提示する。  
「へや」「あそび」「（次の授業）」

## 現在の指導後の様子

- イライラしている時に、自らルーティーンを始めるような行動は、まだ見られない。
- 「イライラは、部屋」と声かけすると「いやだ」と言うこともあるが、待つと自ら感情カードを指さしてから文字盤で「へや いきます」と伝えてからカームダウンの部屋に行くことができるようになった。
- イライラした様子の時に、「かなしい」と「イライラ」の感情カードを提示すると「かなしい」を選ぶこともあり、その場合は泣き出す。